『Women in Struggle—目線—』

監督　ブサイナ・ホーリー
2004年/56分/パレスチナ

投獄生活後を生きる元政治犯の女性たち

清末愛砂　きよすえ・あいさ

被占領地に住むパレスチナ人男性の友人の多くは、少なくとも一度はイスラエル当局によって投獄された経験を有している。拘束後の尋問中にイスラエルの国内治安機関シン・ベトによって受けた過酷な拷問、あるいは刑務所における非人道的な扱いについて、彼らの口から何度も聞かされたことがある。被占領地に住むパレスチナ人の間では、投獄経験が「特異」なものとして認識されることはない。パレスチナ人はもっともらしい「理由」を勝手にでっち上げられ、いつ何時拘束されるかわからない状況で暮らしてきたからである。

イスラエル当局によって政治犯として逮捕され、刑務所に送られるのは男性だけではない。抵抗運動にかかわってきた女性たちも対象となってきた。被占領地に住む人々の屈辱に満ちた生活をリアルに描き出した、米国人の漫画家ジョー・サッコは、コミック『パレスチナ』（二〇〇七年四月、日本語訳、いそっぷ社。一読を薦めたい）で、男性たちの獄中経験だけでなく、ジョーが出会った一人の女性の元被拘束者の経験を紹介している。これは非常に希有な証言である。男性のなかにはある種の「自慢」の気持ちを含めて、獄中経験を抵抗運動の勲章のように語る者が少なからずいるが、女性の場合、同じような語りがなされることはほとんどない。それがどのような意味を持つのかを、ジェンダーの視点から描いたドキュメンタリー映画が『Women in Struggle—目線—』である。

この作品は、四人の元政治犯のパレスチナ人女性に焦点をあて、抵抗運動への参加から投獄にいたるまでの動機や経緯、尋問時や獄中での経験、そして釈放後から現在にいたるまでの生活を彼女たちの語りを通して描いている。

五十代のアイシャとラスミアは、七〇年代前半にイスラエルの占領に抗する武力闘争に参加し、仕掛けた爆弾によって犠牲者を出した事件の罪を問われて逮捕されたのち、十年間獄中にあった。ラウダは仲間とともに爆弾闘争の準備を家でしている最中に誤って爆破させたことにより逮捕され、長い獄中生活を送った。第一次インティファーダ中に学生だったラウダの友人テリーは、他の学生とともに抗議行動に参加し、複数にわたる逮捕と短期間の拘束を経験している。

イラクのアブ・グレイブ刑務所に拘束されていたイラク人男性に対して、米兵が数々の性的虐待をはたらいていた様子を写した写真が、二〇〇四年四月下旬に世界中に流出した事件を記憶にとどめている人も多いだろう。写真に見られた露骨な可虐性は多くの人々に衝撃を与え、その流出は占領の残酷性を「告発」するものとして「良心」的な解釈がなされた。

一方、マスメディアの報道でそれらの写真が使われるたびに、そのなかに写っていた被拘束者たちは、不特定多数の人々の好奇の目に繰り返し晒されるという暴力を経験することになった。あるいは、写真には載っていなかったとしても、同様の虐待を受けていたのではないかという推測から生み出される偏見の眼差しに苦しむ被拘束者もいたのではないだろうか。そのなかには、あのときにほとんど「問題」にもされることがなかった女性たちが含まれていたはずである。

『Women in Struggle—目線—』の前半では、逮捕後の尋問において、全裸にされたアイシャとラスミアに加えられた筆舌に尽くしがたい性暴力の様子が語られる。最初は笑いながらアイシャと話していたラスミアが尋問について話し始めると、表情と語り口調が明らかに変貌した様子をカメラは捉えている。すべてが苦痛だったという彼女にとって、「最悪の出来事」だったのは、全裸にされた彼女に強制的に父親をあてがうという拷問であった。そのことは、癒えない心の傷として今でも彼女のなかに刻み込まれている。

彼女たちの証言は、アムネスティー・インターナショナルなどの人権団体による聞き取り調査によって明らかにされた、米軍支配下のイラクの拘束施設で女性被拘束者が受けた数々の人権侵害と重なりあうものだった。性暴力という屈辱を加えることによって、「自白」や「情報」を引き出そうとする方法はあまりにも酷似しており、等しく醜い。

イスラエル当局が組織的にこの方法を採用していると思われる以上、このような拷問を受けたのはアイシャやラスミアだけではないだろう。しかし、誰もが彼女たちのように語ることができるわけではない。社会のなかで政治犯総体に対する敬意が払われたとしても、個々の生活というレベルにおいては、女性の場合、性暴力に限らず、獄中に囚われていたことに対する偏見の眼差しが待っている可能性が高いからだ。

『Women in Struggle—目線—』は、獄中で受けた屈辱を告発することだけにその目的が置かれている映画ではない。投獄というものが、獄外にいる家族や親せきとの関係、あるいは釈放後の生活にどのような影響を与えてきたのかをトータルに描こうとした点に、この映画の意義がある。パレスチナ社会で元政治犯の女性として生きるときに直面する問題に、敢えて取り組もうとしたブサイナ・ホーリー監督の姿勢もここから見出すことができる。映画を締めくくるアイシャの語りの一部を最後に記しておきたい。「個人的な代償はとても大きかった。拘留中だけでなく解放後の犠牲も大きい。」

本作品は、六月二十五日から七月八日にかけて来日する監督のトークとともに日本各地で上映される。同時に日本語字幕つきのDVDが連連影展FAVによって販売される。申し込み先

fax：03-3401-8944
mail：fav@renren-fav.org